



Into Africa

ウガンダにおけるIPA研修の実施記録



文・アートワーク：
ベルトラーニ・エマヌエーレ
2025

旅の始まり	1
ミミ・ニ・ムアリム	3
小休止 — キガリにて	5
着陸	5
突然の夕焼け	7
ボダボ	9
町	11
学校	15
研修	19
別れのときを迎え	33
墓、部族、宮殿	35
送別会	45
アフリカからの歌	47



旅の始まり

アムステルダムのスキポール空港を離陸した飛行機のエンジンのまわりに、細かい水滴が霧のように立ちのぼる。いよいよ長い旅が始まる。仲間の中には、夜遅くから移動している人もいる。自分はというと、いつものように眠れない。

機体が水平飛行に入り、エンテベ空港へ向けて静かに進みはじめると、不思議な静けさが心の奥に満ちてくる。旅慣れているはずの自分だが、今回は何かが違う。これは、初めてのアフリカだ。

「プリンセス・プロジェクト・イニシアティブ」から、ウガンダで小学校教師や校長先生方に向けたIPA研修を実施してほしいと依頼を受けたと聞いたときは、正直驚いた。

この土地について自分が知っていることを頭の中で整理してみるが、それほど多くはない。ヴィルンガ山脈——マウンテンゴリラの生息地であり、ダイアン・フォッシーが命をかけて研究していた場所。イディ・アミンの独裁を描いた映画。ナイル川の源、ビクトリア湖。隣国ケニアを舞台にしたカレン・ブリクセンの物語、そこに流れる望郷と哀しみ。

知らないものが、きっと待っている。

旅人とはそういうものだ。帰るころには、もう出発時の自分とは違っている。



興味深いことに、「ライオン (simba)」は、自分が知っているスワヒリ語の数少ない単語の一つだ。もう一つは、世界的にも知られている「ハクナ・マタタ」。言うまでもなく、「問題ない」という意味だ。

「“ライオン”と“問題ない”という言葉が、自分の頭の中で同時に存在しているって……なんだか可笑しいな」と思って、つい笑ってしまう。

ミミ・ニ・ムアリム

自分が外国人として旅をする時には、必ず現地の言葉を少しでも覚えるようにしている。言葉を口に出すことで、音が舌の上でどう動くのか——そこには、その言語ならではの「味」がある。すぐには身につかないけれど、大切なものだ。ほんの少しでも、それが出会い方を変える。異文化との接し方そのものを変える。

エンテベまでのフライトの間、自分はスワヒリ語のメモを何度も見返して、できるだけ多くの単語を覚えようとする。

そうしているうちに、不思議なつながりが頭に浮かんでくる。

「mtu」は“人”。「mto」は“川”。この二つ、関係があるのだろうか？

人の一生は川のように流れていて、見えないながらも確かな方向があるのだろうか？水は絶えず変化しながら海へと流れていく。つまり、ヘラクレイトスが言ったように、「同じ川に二度と入ることはできない」のかもしれない。

そして「子ども」は「mtoto」。

音の繰り返し、まるで中国語の愛称のように可愛らしく響くのが面白い。

スワヒリ語には、他の言語から取り入れられた言葉がたくさんある。

近代的な単語の多くは英語由来で、たとえば「dareba」は「driver（運転手）」が語源。

文化に関する語彙ではアラビア語の影響が色濃く、「mwalimu（先生）」、「madras（学校）」、そして「samak（魚）」など、食文化にも見られる。他にも、フランス語やオランダ語の影響も少なからず存在するらしい。

それでも、スワヒリ語は決して人工的に感じられない。

むしろ、深く大地に根を下ろす力強い木のような。霧の中に半分隠れた根が、確かにこの土地に生きていると感じる。

練習しているフレーズの中には、「mimi ni mwalimu（私は先生です）」というものもある。

ちょうどその時、飛行機が突然乱気流に巻き込まれ、大きく揺れた。

「本当にそうだろうか？　今まで何度もそうだったように、今回もきっと——自分が与える以上のものを、受け取ることになるのだろうか」と思う。

数時間後には、ほとんどの仲間たちが「私たちはスワヒリ語ではなく、ルガンダ語を話しますよ」と教えてくれることになる！

小休止 — キガリにて

飛行機はルワンダの首都キガリに短時間立ち寄る。窓は少し曇っていてあまり外は見えないが、90年代後半の出来事の映像や写真が脳裏に浮かぶ。アフリカは、今この瞬間にも「この土地は別のルールで生きている」と語りかけてくる。あらゆる意味で、極端さが際立つ場所だ。

着陸

飛行機が大きくブレーキをかけて停止したときには、もう外は真っ暗だ。空港を出ると、夜の空気が一気に押し寄せてくる。少し湿っていて、ほんのり暖かいが、どこか自分が慣れ親しんだ匂いとは違う。その空気を深く吸い込んだとき、「ああ、本当にアフリカの大地に足を踏み入れたんだ」と実感する。フィオナがすでに迎えに来てくれている。彼女は双子の母親で、ウガンダでは双子の誕生は大きな祝福と誇りの対象なのだという。フィオナの姿からは、明るさと芯の強さがにじみ出ている。心からの笑顔で迎えてくれて、彼女のハグはしっかりと力強く、そして本物の温かさがある。



運転席が右側にあり、ナビの表示が日本語であることから、この車の出自は明らかだ。
「多くの国では寿命とされるような中古車がアフリカに送られる」と聞いたことはあった
が、実際にここまでとは思わなかった。
この五日間の滞在中、日本車以外の車を見かけたのは、ほんの数回だった



突然の夜明け

ディレクターのエスターが言っていたことを思い出す。

「赤道のすぐ近くだから、朝6時から夕方6時までが明るくて、それ以外はあっという間に真っ暗になるのよ」

朝8時に朝食をとる予定だが、目覚ましは6時半にセットする。夜から朝への移り変わりは驚くほど急で、まるでタイムラプス映像のようだ。歯を磨く時は、ミネラルウォーターを使うことを自分に言い聞かせる。

ホテルのロビーでは、エスターとジュディットがすでに待っている。

ジュディットは、編み物をしながら時間を有効に使っていて、生まれたばかりの孫のための毛布を編んでいるとのこと。それが彼女にとって、大きな喜びと誇りになっているのがよく伝わってくる。今日の研修の準備は万端だ。

アクティビティはしっかり確認した。万が一忘れてもいいように、スマホにメモもしてある。カメラのバッテリーも満タン。

不安はない。でも、せっかくここに来ているのだから、一瞬一瞬を大切にしたい。この場所にはそう頻繁に来られるものではないのだから。

しかし、待てど暮らせど、何も起こらない。三十分ほど経ったころ、エスターに尋ねると――

「アフリカン・タイムよ。大丈夫、きっと来るから心配しないで」

他の地域だったら、こうした遅れは問題視されるだろう。でもここでは、悪気があるわけではない。それが普通なのだ。確かに不便だけれど、同時に、時間に縛られすぎないということは、それ以上に大切な何かがあるということかもしれない。ウガンダが、自分に新しい時間の感覚を教えはじめています。

フィオナが明るい笑顔で現れ、再び温かいハグをしてくれる。車に乗り込み、フィオナとエスターが談笑するのを横に、レンズキャップを外してカメラのマニュアル設定を調整する。

すると、ジュディットがふいにこう言う。

「そういえば、ウガンダの道路のことは、もう聞いてたかしら？」

「えっ？ 何のこと？」

「……見ればわかる



ボダボダ

大学生の頃、アフリカ文学の授業を取ったことがある。
フィオナは、この大陸の人々が持つ語り力を体現する存在だ。
学校へ向かう車内でも、彼女は道中ほぼずっと、まるで物語を編むように、ウガンダについて語り続けてくれる。

「ヨーロッパでは自転車はスポーツでしょ？ でもここでは、日常の足なんです。いたるところにあります。ボダボダって呼ぶんですよ。若者が多いのに仕事が少なく、失業している人が多いから、こういう仕事が貴重な収入源になるんです」

窓の外の光景は、想像をはるかに超えている。

あらゆる種類のバイクが、驚くほど自由自在に、さまざまな方向から私たちの車の周りを走り抜けていく。

一家全員で一台のバイクに乗っていたり、自動車部品を運ぶ若者がいたり、保守的な服装をしたムスリムの女性が乗っていたりする。

ボダボダの運転手たちは、情報発信の媒体としても使われているらしい。



蛍光色のジャケットには、検査や予防に関する啓発メッセージが記されていて、それを目にすることで、この国の人々が毎日直面している課題の大きさと複雑さが一瞬で伝わってくる。

それがたとえ、首都カンパラの真ん中であっても。



ジュディットが興味深い観察を口にする。

「こんなに自由に走り回ってるのに、滞在中、事故は一度も見なかったのよね。

事故の跡がある車すら見なかったわ」

確かにそうだ。混沌として見えるけれど、そこには何らかの暗黙の秩序があるのかもしれない。

街

私たちのルートは、ホテルの中心部から少しずつカンパラ郊外へと移っていく。吸収しきれないほどの情報が流れ込んでくる。後でじっくり見返すため、カメラのシャッターを何度も切る。大型バスがタクシーのように走り、どこかで見たような、でも少し違う中国風の文字が描かれた看板が目に入る。突飛に思えるかもしれないが、建設現場や倉庫を見るだけでも、中国の影響力の大きさは一目瞭然だ。道の脇の赤土の色が目を引き。まるで夢の中に出てくるような鮮やかさ。一瞬前には青果を売る屋台があり、次の瞬間にはマネキンが立っている。体型もディスプレイの仕方もヨーロッパとは全く違うが、カラフルで陽気な布が美しく飾られている。車が大きく揺れて、ふと我に返る。

「だから言ったでしょ」ジュディットが笑う。

クレーターと呼ぶには少し詩的すぎるかもしれないが、決して大げさとは言えない。フィオナは「渋滞を避けるためよ」と言って、舗装されていない迷路のような脇道に車を入れる。

車はまるでポニーのように跳ね、そのたびに車の下から鈍い音が響く。

周囲にはたくさんのお子どもたちが遊んでいる。

その中には、明らかに貧しい環境で育っているとわかる子もいる。

一部の子は黄色いポリタンクを運んでいて、それが「この家には水道がない」ことを示している。子どもを守りたいという本能が、胸の奥で疼く。

だが、自分の価値観で、知らない国の、知らない人々をすぐに判断してはいけな
い——そう自分に言い聞かせる。フィオナは話を続けながら、ある種の人生の真理の
ようなものを、そっと教えてくれる。

「昔、すごく遠くから来た女性がいたの。子どもたちがひとりで学校に通っているの
を見て、とてもショックを受けたみたい。“フィオナ、これはダメよ、何かしなきゃ”
って言ってきたの。でも私は言ったの。『私はただのフィオナよ。全部は変えら
れない。でも、できることは全力でやる』って」

子どもを守ることは大切。でも、
そればかりになってしまうと、子
ども自身が自立する機会を奪って
しまう。

何の困難にも直面せずに育った子
どもは、大人になったときに社会
の現実と向き合えない。

とはいえ、自分の国の子どもたち
が経験する困難と、ここでの現実
とでは、その重みは比べものにな
らない。





この旅を通して、私は多くの厳しい教訓を学んだ。
その中で最も大きな気づきは、おそらくこういうことだ。
—— 問題の規模と複雑さは、ひとりの人間がたった一つの行動で何もかもを変
えることを、不可能にしてしまう。
それでも、その一つ一つの小さな行動には、本当に意味がある。
どんなに小さくても、それは確かに変化をもたらす力を持っているのだ。



学校

鉄製の門をくぐり、私たちはチャイルドタイム・ブルックサイド・アカデミーに到着する。この学校は、鮮やかな青色に塗られた三階建ての建物で、周囲には小さな芝生と青々とした木々が広がっている。左手には小川が流れていて、私たちの研修期間中、笑い声が落ち着くたびに、その優しい水音が常に活動の背景に流れていた。

それ以外に耳に届くのは、風に揺れる葉の音くらい。

驚くほどの静けさだ。けれども、その静けさのなかには、確かな「成長の気配」がある——時間をかけて、けれど確実に、何かが育っている

校舎の一部はまだ建設中だが、どこを見ても、学校への献身と誠意が感じられる。

ひとつの教室に足を踏み入れると、ざらついたコンクリートの床がきれいに掃除されているのが目に入る。

壁は明るく、元気の出る色で塗られていて、大きな手作りのポスターがいくつも貼られて



いる。そのデザインやイラストには、ひとつひとつに心を込めた丁寧さがにじみ出ていて、彩りとしての装飾も添えられている。胸がぎゅっとなる。

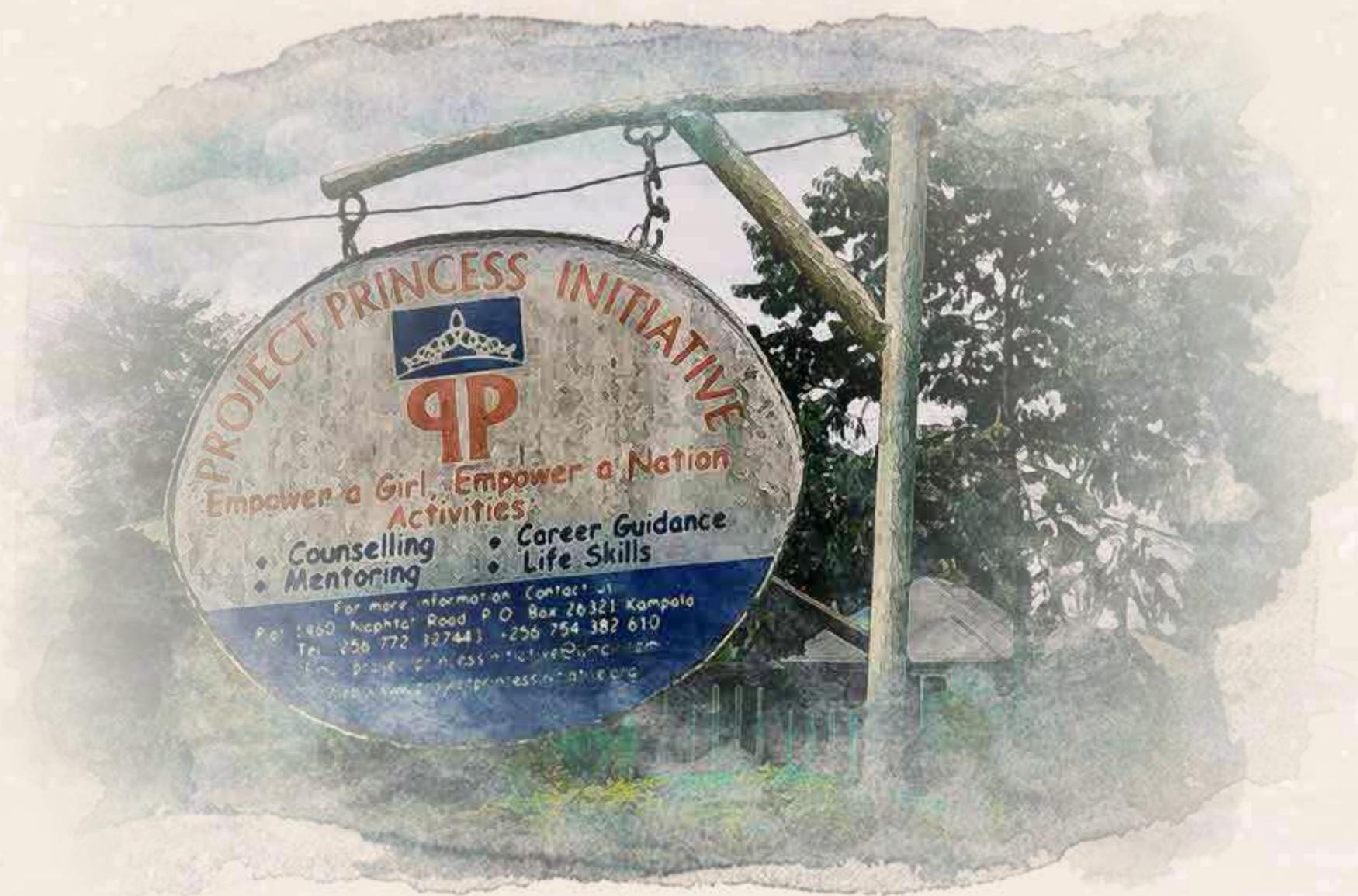
一瞬、自分が日本の田舎にいたころのことがよみがえる。小学校で英語を教えていた頃、自分で作ったポスターを教室に飾り、経済的に恵まれない家庭の子どもたちと向き合っていた日々。でも——やはり、ウガンダは別の現実だ。

ポスターに書かれた言葉を見れば、それがはっきりとわかる。

「催涙ガス」「有刺鉄線」「カミソリの刃」など、衝撃的な単語が並ぶ中で、「家族」「医者」「教育」といった言葉も同じように描かれている。

そして何よりも、ここは「プリンセス・プロジェクト・イニシアティブ」の拠点でもある。

これはフィオナの発案で始まったプログラムで、暴力や虐待を経験した女の子たちが学校教育を最後まで受けられるよう、支援を行っている。





この場所には、はっきりと感じられる「コミュニティの温もり」がある。
ここで過ごす時間が長くなるにつれ、私たちの仲間との絆も深まっていく——
心からの笑いと、じっくりとした対話を重ねるうちに、私たちは徐々に気づいていく。
ウガンダという国の心と知性には、深く根ざした「つながりの力」が、確かに流れているのだと。





CHILDTIME BROOKSIDE ACADEMY

MOTTO: Train a Child....Prov.22:6

VISION: To train children the way they should go in the following Ways:

- * academically
- * emotionally
- * socially
- * physically
- * spiritually

MISSION: - To attain academic excellence.
- Training children to be confident, responsible and respectful citizens.



研修

「レッスンプランなんて、基本的には捨てるためにあるのよ。」

それは、エスターから聞いた数ある驚きの言葉のひとつだった。そして彼女が本気でそう言っていることが、よくわかる。

IPAの研修は、非常に綿密な準備を必要とする。私たちは、参加者を三時間も座らせて、あるテーマの理論や“良い実践”について延々と講義をするようなことはしない。私たちが目指すのは、実際に手と身体を動かして体験する、具体的で現実的な学びだ。確かに手間はかかるけれど、その分、深く定着し、長く残る学びになる。

つまり、シンプルに言えば——「自分自身で学びを作り出すと、より深く学べる」のだ。だからこそ、私たちは毎日の研修を細かく計画し、もっとも適切なアクティビティを選び出し、それを現地の文化的背景に合わせて丁寧に調整していく。

訪れる土地の文化や状況について、私たちは多くの時間と労力をかけて学ぶ。

それでも、それだけでは足りない。

本当の「冒険」は、現地に着いて、実際に人と出会ったその瞬間から始まる。そのとき、事前の設計段階で「参加者」として想定していた存在は、現実の「人」になる。それぞれが、強みや弱みを持ち、好奇心、願い、不安、そして夢を抱えて生きている。私たちは、その“人”たちに出会い、共に学び合うためにここにいる。

それを実現するには、柔軟さが欠かせない。いくつかのアクティビティを入れ替えたり、ときにはモジュール全体を組み直す必要があるかもしれない。大事ななのは、学びが

本当に起きているかどうか。そして、参加者が費やす時間と努力に、しっかりと価値があると感じられること。

——だからこそ、エスターはあの言葉を口にしたのだ。

「学習者中心」——そう聞くと美しく響く。でも、それを現実にするというのは、まったく別の話だ。研修の中で人と出会うことは、本当に特別な体験だ。

そこで得られる気づきや発見は、予想をはるかに超えるものばかり。今回の研修では、複数のグループが並行して進行し、扱うテーマも幅広い。トラウマに配慮した教育、ホールスクール・アプローチ、コミュニケーション、そして対立のマネジメントまで。エスターとジュディットはベテランのトレーナーであり、ただ彼女たちを観察しているだけでも学ぶことは尽きない。トレーナーにもさまざまなタイプがいる。

ローカルミュージックを流して場を盛り上げるスタイルが好きな人もいれば（今回のチームにも一人いる）、私のように、落ち着いた雰囲気の中でもアクティブな進行を好む人もいる。研修中は、参加者とトレーナーの間に絶えず対話が生まれ続けている。

これは、とても集中力を要する仕事だ。でも、私たちはこう伝えたい——

「私たちはあなたたちのためにここにいる。あなたたちと一緒にここにいる。でも、その旅路を代わりに歩くことはしない。」

意外に思われるかもしれないが、優れたトレーナーというのは、あまり多くを語らない。彼らは環境を整え、必要な支援を提供し、「場の空気」を読みながら柔軟に対応する。けれども——学びにおいて最も大切なこと、つまり「自分の学びに自分で責任を持つ」という重み、そしてそこにある喜びを、決して奪うことはない。

良い研修とは、参加者にもトレーナーにも、自分自身について新たな発見をもたらしてくれるものである。最初に行うアクティビティは、参加者同士が出会い、ひとつのグループとしてまとまるためのものだ。そこには、自然と情報のやり取りが含まれている。そして、予想外の驚きが、必ずやってくる。

たとえば――

「学校で叱られたことがありますか？」という質問に対して、私は正直に「はい」と答えた。

すると、何人かの参加者が本当に驚いた顔をする。

こちらでは「叱られる」ということは、かなり深刻な意味を持つのだという。

その一方で、ある女性の参加者は、こう語ってくれた。

「私、子どもが7人いて、孫が21人いるの」

その言い方はあまりにも自然で、誰もがその場に溶け込むように聞いていた。

「なぜかって？ ――だって、できるから。

村にはいつもたくさんのお食べ物があるし、家族も本当に大きいのよ。

誰かしら助けてくれる人がいるから、どこかに用事があっても、安心して子どもを誰かに預けて行けるの。

でもね、ヨーロッパみたいに、みんなが一人で暮らしている国だったら――私、きっと子どもを産まなかったと思う」



ウガンダにおける顔立ちや髪型の多様さは、この国の民族的な豊かさを物語っている。

1986年以降、ウガンダは政治的に目覚ましい安定を維持してきた。

後のセッションで、ペアになって対人関係に関するテーマを話し合っていたときのこと。まったく予期していなかった、もうひとつの衝撃があった。

ペアの相手が、ウガンダにおけるコミュニケーションのあり方を説明しながら、こう言った。

「もちろん、みんな同じってわけじゃないけど……話し相手が誰かによって、やっぱり変わる部分はあるのよ。たとえば、その人が年上だったり、立場が上の人だったりするとか……。

それとね、あなたと話していると、たぶん中には“この人は白人だから、もっとちゃんと話を聞かなきゃ”って思う人も、いると思うの」

自分の肌の色が、相手の反応に影響を与えているかもしれない——そんなこと、今まで一度も考えたことがなかった。

受け入れるのは決して簡単ではないけれど、これはまたひとつ、現実を教えてくれる証なのだ。

いくら社会が前に進んでも、ウガンダが過去と向き合い続けなければならないという事実は変わらない。

とはいえ、研修が進むにつれて、お互いの距離は少しずつ縮まっていく。

私たちが感じたのは、終始一貫した親しみやすさと温かさだった。

抵抗を感じたことは一度もなく、関係性が深まっていくにつれて、本当に意味のある対

話が生まれていくのを実感する。

研修には、個人レベルでもグループ全体でも、明確な目的が必要だ。

目的地が明確だからこそ、進むべき道が見えてくる。

ウガンダの教育者たちが抱える問題の中には、世界中の先生たちと共通するものも多い。たとえば、教室のマネジメントや、問題のある生徒への対応などだ。

そうした話を聞いたエステーの返答は、意外性に満ちていて、それでいて深く心に響いた。

「私はいつも言うのよ。

“本当に学びが起きている教室って、うるさい教室なの”」

しっかりした「規律」こそが教育の基本だと思っている人にとっては、かなり受け入れにくい考え方もかもしれない。

もちろん、これは教室の無秩序を推奨するものではない。

大切なのは、“表面的な秩序”を押しつけることではなく、

生徒たちが自分自身の力で学びを体験できる環境を整えることなのだ。

他にも、私たちが思いもしなかった問題がいくつも浮かび上がってくる。

ウガンダでは、UPE（ユニバーサル・プライマリー・エデュケーション）とUSE（ユニバーサル・セカンダリー・エデュケーション）制度によって、初等・中等教育は公式には「無償」とされている。



全体の状況を見れば、気が遠くなるような思いに襲われることもある。
「わずかな人数の研修に対応する小さなチームに、いったいどれほどの意味があるのか？」と、疑問に思う人もいるだろう。けれど、それは本質を見誤った問いかけなのだと、私は気づいた。
たしかに、こうした問題すべてを解決するには、莫大な努力と長い時間が必要だ。それでも、「今ここで」できることは、たしかにある。

——だからこそ、私たちはここにいる。

政府からの補助金も出ている。だが、実際にはその資金が届くのが遅れがちで、多くの学校では、教科書、制服、試験などに対する追加料金が必要となる。

その結果、貧しい家庭にとっては、「無償教育」とは名ばかりのものとなってしまう。

ある場合には、保護者が支払いを終えるまで、子どもが学校に通えなくなることもあるのだという。

さまざまな奨学金制度も存在する。

政府、宗教団体、NGO、そして個人の支援者によって支えられているものだが——それでも、ニーズの方が圧倒的に上回っている。

結果として、多くの家庭が非常に厳しい状況に置かれ、多くの子どもたちが中等教育を修了できずに学校を去ることになる。

そして、先生たちが繰り返し語っていたのは、給料が高くないこと以上に、「ちゃんと支払われるかどうか」が最大の懸念だということ。

これは、私の国でも少なからず共通する問題だ。

また、「安全」は、すべてのグループが共通して重視していたテーマでもある。

理想の学校像を描くアクティビティでは、どのグループも「フェンス」「門」「警備員」といった安全対策を最優先事項として挙げていた。

それでも、たくさん笑う時間もある。たとえば、ジュディットのグループがあまりに盛り上がっていて、私たちの活動が一時中断されたとき。

私たちのグループでは、非暴力コミュニケーションを使って、緊迫した状況をどう対処するかをテーマにロールプレイを行っていた。

私は「先生」の役を与えられ、相手役は「怒りと悲しみに満ちた保護者」。その演技力は見事というほかない。2分も経たないうちに、彼女が言う。

「それで……このムズングは一体なにしに来たの？」

その言葉、「ムズング」は、白人を指すスワヒリ語。メモに書いてあったのを思い出す。「奥様、確かに私はウガンダの出身ではありませんが……実のところ、私の国の学生はとても怠け者です。

ウガンダの生徒たちは本当に優秀だと聞きましたので、それで来たのです」

その言葉に、彼女——“母親”役の参加者は顔をほころばせ、クレームは終わった。

もちろん、実際の現場であれば、こんなにうまくいくとは限らない。

そもそも、こうした課題の多くと同じく、コミュニケーションは単純なルール適用だけではどうにもならない。

「私たちは、“あなたが誰か”ではなく、“あなたが何をするか”に注目するんです。

あなたという存在には、問題はありません。

問題があるとすれば、それは行動の方——だからこそ、そこにこそ働きかけができるのです」

研修のなかでも特に楽しい瞬間のひとつが、「英語を使わずに、現地の言葉を教える

10分間のミニレッスン」を考えてもらう活動だった。

キスワヒリを選ぶグループもあれば、ルガンダを使うグループもある。

私はどちらの言語もまったく理解できない“初心者”であり、そこには2つの意味がある。

まず第一に、何も理解できないという状態を思い出させてくれる。

語学教師として、自分が常に意識しておきたい感覚だ。

そして第二に、参加者たちは“学習者の視点”に立って活動を設計することを求められる。

当然ながら、私は何度もミスをするし、発音もうまくいかない。

私の“先生”役の皆さんは、対応に四苦八苦しながらも、根気よく向き合ってくれる。

活動の終了が、学びの終わりではない。

私たちは必ず、振り返りの時間を設ける。

参加者本人だけでなく、観察していた他の人たちも含めて、何が起こったのかを一緒に考える。

何かを“やってみる”というのは、学びの第一歩に過ぎない。

ジュディットがあるセッションで引用していたジョン・デューイの言葉が、それをよく表している。

「私たちは“経験”から学ぶのではない。
“経験について振り返ること”で学ぶのだ」

グループ全体が積極的にに関わり、誰もが自由に発言できる雰囲気ができると、議論は一気に深まっていく。

目標言語はどうやって決めるのか？
ミスをどうやって指摘するのか？
活動のテンポはどう保つ？
教材は何を使い、なぜそれを選んだのか？

それらすべてが、学びの一部になる。





トレーナーも失敗することがあるということ、そして学びのためであれば、自分が少し笑われるような立場に立つこともいとわないという姿勢——
この二つは、参加者との信頼関係を築き、不安を和らげるために非常に効果的な方法だ。

人はその能力や選択だけで定義されるのではない。
むしろ、どんな失敗をしてきたか、そこにどう向き合ってきたかによって、その人らしさが表れる。

失敗がなければ、学びもないのだ。

午前中のセッションが終わると、学校のキッチンで用意された、シンプルだけれどとても美味しい食事をいただく。時折、保護者に連れられて小さな子どもたちが校庭に入ってくる。走って逃げていく子もいれば、近づく勇気が出ない子もいる。けれど、日が経つにつれ、私たちが日常の風景の一部になっていくと、最初は臆病だった子どもたちも、少しずつ近づいてくるようになる——まるで『星の王子さま』のキツネのように。

五歳にも満たない女の子に折り紙で鶴を折ってあげると、彼女は丁寧なおじぎで「ありがとう」と言ってくれた。

その仕草は、「プリンセス・プロジェクト・イニシアティブ」の精神に、まさにぴったりと重なっていた。

毎日の終わりには、仲間たちと別れを告げる。疲れはあるけれど、それ以上に温かな充実感が胸に広がっている。

デコボコの道を戻りながら、再び目にするのは、困難と現代性、そして現地ならではの工夫が入り混じった不思議な風景だ。

手作りの赤いレンガが太陽の下で乾かされ、道路の脇にはヤギや牛が草を食んでいる。ボダボダが、まるで擦れそうなほどの近さですり抜けていく。

ユニークな発想に満ちた看板やスローガンの数々は、まさにひらめきの結晶。



南国の果物があふれる巨大な市場では、フィオナが時折立ち寄り、車に積めるだけのスイカやパイナップルを買い込む。

そして、いつもそこにいるのが、AK47を携えた警察官や軍の兵士たちだ。



市場に立ち寄ったとき、私はフィオナに、自分の考えがどれほど変わったかを話した。ウガンダの人々は、自分たちが何者であるかに誇りを持っていて、彼らが築こうとしているものに対して、哀れみではなく、敬意を払うべきだ——それが、私の正直な印象だった。フィオナはうなずいて、こう言った。

「その通りよ。ここの人たちは、働くのが好きなの。もっと良い国をつくりたいと思ってる。私たちが必要としているのは、施しじゃなくて、“導き”なのよ。」



夕食のあと、私たちはその日のセッションを振り返る時間を持つ。気づきを共有し、議論し、戦略を練る。研修の構成を見直し、いくつかのアクティビティを調整したり、時には完全に削除したりもする。

ベテランの同僚たちが見せる、尽きることのない情熱と細部へのこだわりには、本当に頭が下がる。私が若いころに学んだ教育学の基本理念のひとつは、「人をあまり褒めすぎないこと」だった。結果に満足してしまい、それ以上努力しなくなることを防ぐためだ。でも、ここはまったく違う。

「この活動は、ここまではうまくいってる。じゃあ、次はどうやってもっと良くできるか考えよう」

そんな前向きな姿勢が、いつもそこにある。

夜、ホテルの自室に戻り、かすかに聞こえる車の音を蚊帳越しに聞きながら、

私はこの国に対して、不思議な懐かしさのような感情を感じる。

まだほんの少ししか知ることができていないこの国に――

そして、静かな優しさをもって私を迎えてくれる人々に

――

心が、静かに揺さぶられていた。



別れのときを迎える

最終日には、プレゼントの交換と、「またすぐに会いましょう」という約束で締めくくられた。

ウガンダでは、誰かに贈り物を渡すとき、膝をついて差し出すのが習わしだ。私の国でこれを見れば、きっとさまざまな反応を呼ぶだろう。

けれど、ここではそれが自然な振る舞いなのだ。

さらに、地元のダンスパフォーマンスを披露していただくという、光栄な機会にも恵まれた。

現代的なものもあれば、伝統的なものもある。

そのどれもが、文化や伝統に対する深い誇りと敬意を、あらためて感じさせてくれるものだった。



「ムズング」という言葉は、文字通りには「さすらい人」——「旅をする者」という意味だ。感謝の言葉を述べる番が私に回ってきたとき、私はこう伝えた。

「私はこの世界の中で、ひとりの旅人にすぎません。でも、あなたたちはそんな私に、“ここがあなたの家だ”と感じさせてくれた。まるで、家族の一員になったかのように思わせてくれました。」

墓、部族、宮殿

Parents Internationalでは、研修プログラムの中に必ず文化体験の機会を組み込むよう努めている。それによって、現地の状況をより深く理解するとともに、私たち自身が参加者の皆さんに常に勧めている「生涯学習」という姿勢を実際に体現することを目指している。

フィオナは、私たちのために充実した文化プログラムを丁寧に用意してくれた。

訪れた場所のひとつが、伝統舞踊の豊かな遺産を守るために設立された「Ndere文化センター」だ。

ここでは、伝統的な建築もまた大きな魅力のひとつとなっており、展示されている建物にはさまざまなタイプがある。

たとえば、ホビットの家を思わせるような「おばあちゃんの家」や、食料の保存に使われていた葦でできた高床式の小屋などがある。





これらの葺の小屋を見ていると、どうしても神道の神社との類似性を感じずにはいられない。おそらく、あの建築様式も、もともとは東南アジアの高床式の穀倉が起源だったのだろう。

そしてふと、人類がいかに遠くまで歩んできたかという思いに圧倒される。数百万年前、最初の狩猟採集民たちがアフリカを旅立ってから、これほどまでの道のりを積み重ねてきたのだ。

私たちが訪れた場所の中で、おそらく最も印象的だったのは、カスビ王墓——ユネスコの世界遺産にも登録されている、ブガンダ王国の歴代国王の墓所だ。私たちを迎えてくれたのは、なんと前王に仕えていた首相その人だった。この地を案内してくださるのも、彼である。

敷地に入る前、私の同僚たちは大きな布を脚に巻きつける。それは、この場所の神聖さに対する敬意を示すためのものである。

カスビ王墓の建物は、意外なほど装飾が少なく、簡素だ。それでも、空気には強い神聖さが漂っている。

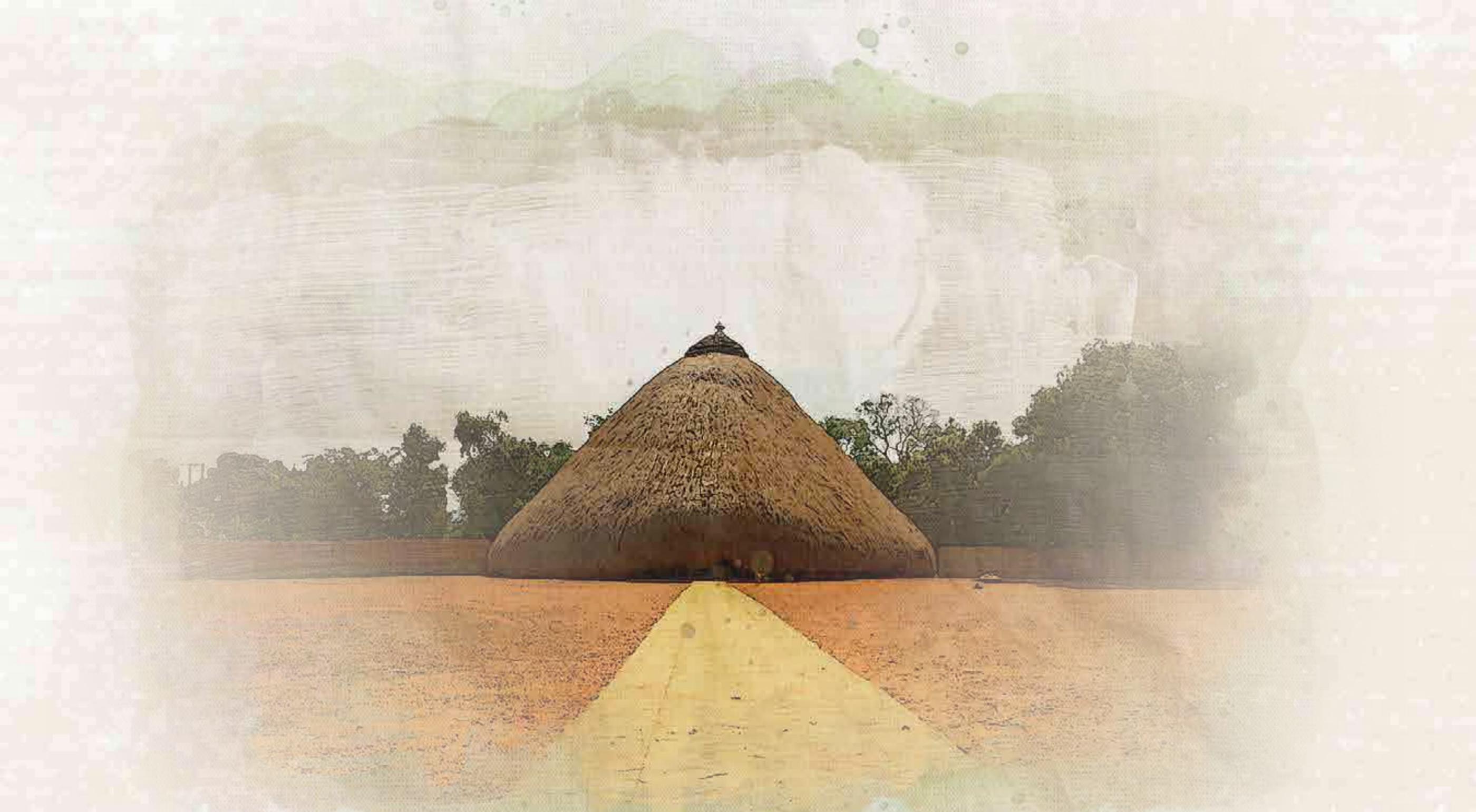
すべての建物の屋根は、美しく編まれた茅葺で、イチジクの木から取られた柱によって支えられている。入口の建物の天井は、葦を用いた同心円状の輪で構成されていた。

「一番上の輪は、王の頭の大きさを測って作られました。なぜなら、王はすべての上に立つ存在だからです。その下の輪はすべて、ウガンダに存在する56の氏族を表しています。すべての氏族がここに象徴され、すべてが役割を持っているのです」

ガイドの方は続けて、こう説明してくれた。

「イギリス人がウガンダにやって来たとき、彼らはブガンダ王国がこの地域で最も組織だった統治体制を持っていると判断しました。

そのため、彼らはすでに存在していたこの体制を基盤として、支配を行ったのです。イギリス人が最初にウガンダに来たのは、ムテサー一世の招きによるものであり、その後保護領としての時代が始まったのです」



● 王という存在が、生者の階層の頂点に立つものでありながら、先代たちの前では再び「王子」として立ち返る——

この考え方には、計り知れないほどの魅力がある。

こうした伝統の多くは、ウガンダ文化の根幹に深く根づいており、それを変えるという発想そのものが、そもそもあり得ないのだ。

さらに、声に重みを込めて、こう語ってくれた。

「私たちの文化では、王は“死ぬ”ではありません。“森へと姿を消す”のです。ですから、王が亡くなったとは考えず、“消えた”と理解されます。そのため、現役の王がカスビ王墓を訪れる際には、自らの王としての装飾品をすべて外し、再び“王子”の姿で中へ入ります。ここに住んでいる王の太鼓奏者が、その王を出迎えるのです。ただし、その太鼓奏者は生涯独身でなければならず、この場所に入れるのは男性だけと決まっています」

実際の王の墓は、大きな円錐形の茅葺きの建物の中にあり、その周囲には「姿を消した」歴代の王たちの家族の住居が並んでいる。

「王は一人で眠ることはできません。もし夜中に目を覚ましたときのために、必ず誰かがそばにいてお世話をする必要があるので」——そう説明された。

亡くなった王の妻たちは、月ごとに交代でこの墓の中に住んでいる。自由に出入りすることは許されているが、夜になると必ずこの小屋で過ごすという。

「昼間は、訪問者を迎え入れて、食事をふるまいます。この墓所は誰でも自由に訪れることができます。でも、王が“ひとりきり”になることは決してありません。特に夜は、誰かが必ずここにいななければならないのです」

私たちは、地元の工芸品も見せていただいた。その中には、乾燥させたイチジクの樹皮から作られた布もあり、どうやらこれが世界最古の織物の一つなのだという。

そして、私や仲間たちがもっとも驚いたのは、いわゆる“アニミズム的な信仰”とキリスト教の教えとが、共に共存しているという事実だった。

——どうにかして、それは両立するものなのだろう。

A traditional Japanese thatched-roof building, possibly a shrine or a simple dwelling, stands in a rural landscape. The building has a steep, conical roof made of straw or reeds. It is surrounded by a low wall and is set against a backdrop of trees and a distant mountain range. The scene is rendered in a soft, painterly style with muted colors.

喪に服すことに、あらかじめ定められた“時間の区切り”が必要だという考え方は、とても興味深い。ある意味、それはこの国の生き方のひとつの現れのように思える。未来を心配しすぎたり、過去を悔やんだりするのではなく、

「今この瞬間」にある問題と真摯に向き合うという姿勢。

それは決して、共感が欠けているという印象ではない。むしろ、現実を受け止めながら生きていくための、賢明な対処法のように感じられる。

——結局のところ、人間が生きられるのは「今」だけなのだから。

ルビリ王宮と政府庁舎は、「カバカ・アンジャガラ・ロード」と呼ばれる道で結ばれている。「カバカ・アンジャガラ」とは、文字通り「王は私を愛している」という意味だ。この道は、実用的な意味を持つだけでなく、深い象徴性も備えている。道の両側には、ブガンダ王国に属する各氏族のトーテム（象徴）をかたどった大きな彫刻が立ち並んでいる。その中には動物もあれば、植物やキノコを表すものもある。

この道を通るたびに、王は自国のすべての氏族と、その一人ひとりを思い起こすことになるのだ。

政府庁舎の見学は許可されておらず、現在の国王ロナルド・ムウェンダ・ムテビ2世の像を素早く撮影するための、ほんのわずかな時間しか与



えられなかった。王宮のほうでは、もう少し運に恵まれた。いつものようにAK47を携えた警備兵のひとりが、掲げられた国旗を指差す。

国王が現在宮殿に滞在しているため、建物の中に入ることは許されなかったが、庭園を見学することはできた。

私たちのツアーは、少し不穏な空気のなかで始まった。ガイドの女性は満面の笑みで私たちを迎えてくれたが、その第一声がこれだった。

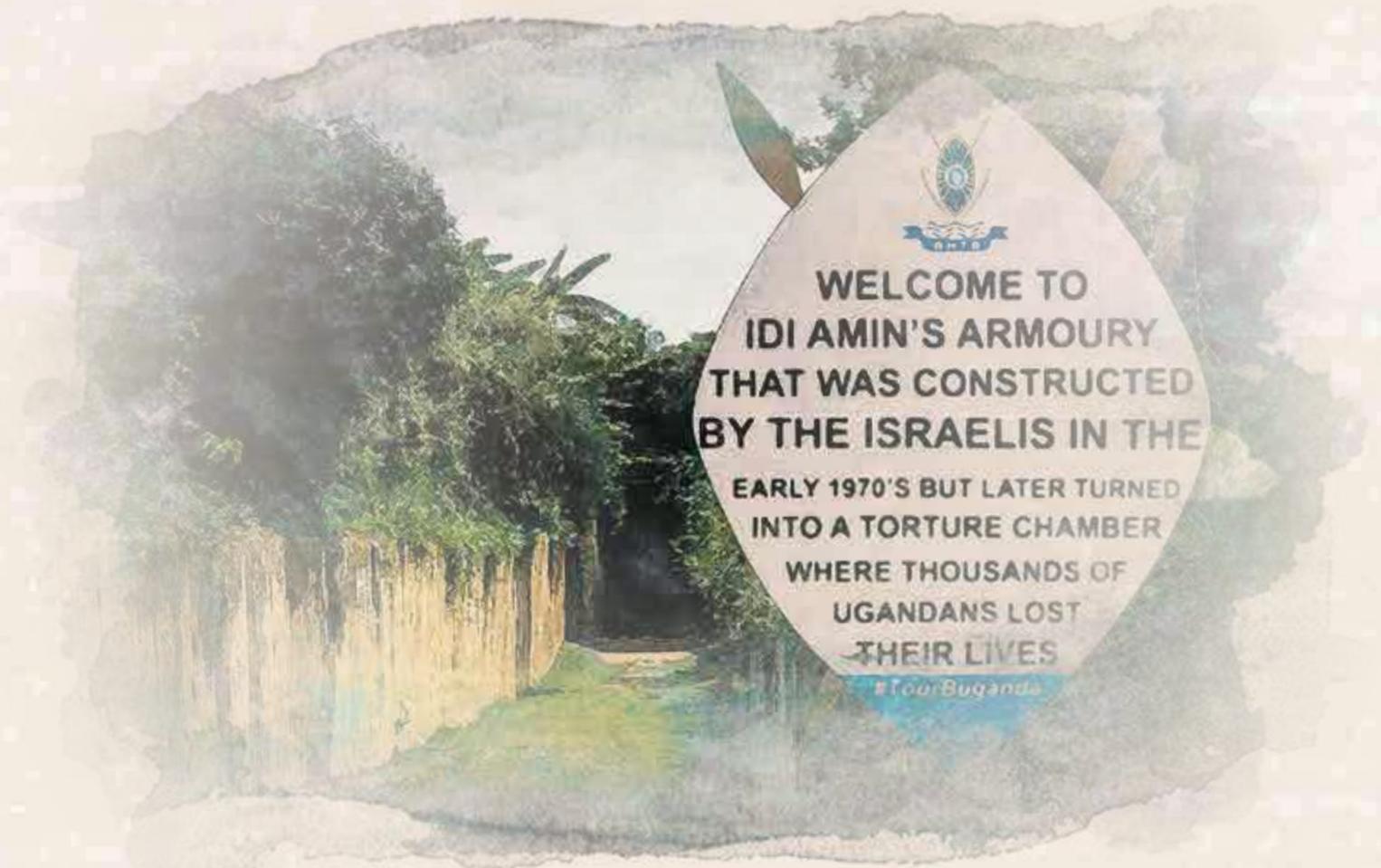
「まずは、イディ・アミンの拷問部屋からご案内します」

2006年の映画『ラスト・キング・オブ・スコットランド』では、カリスマ性と残酷さを併せ持つ独裁者として描かれたイディ・アミン。

彼は今でもウガンダ国内で賛否が大きく分かれる存在だ。

8年間にわたる彼の統治は、数えきれないほどの暴力と弾圧で知られている。

しかし一方で、強力な指導力とインフラ整備による国への貢献を評価し、彼を称賛する声も少なくないという。



WELCOME TO
IDI AMIN'S ARMOURY
THAT WAS CONSTRUCTED
BY THE ISRAELIS IN THE
EARLY 1970'S BUT LATER TURNED
INTO A TORTURE CHAMBER
WHERE THOUSANDS OF
UGANDANS LOST
THEIR LIVES
#TourBuganda

この拷問部屋は、もともとは武器庫として設計された場所だった。最初に見たときは、それほど恐ろしげな印象を受けなかった。だが、無機質なコンクリートの壁に反響するガイドの声とともに、そこに刻まれた過去の苦しみの一端が、少しずつ浮かび上がってきた。

「囚人たちは目隠しをされ、一日中あちこち連れ回されていました。

そうすることで、ここに連れて来られたときには、まだカンパラにいるとは思えないようにするんです。この印、見えますか？ これは、かつてこの拷問部屋を満たしていた水の高さを示しています。電流を流して、囚人が望まれる情報を口にするまで電気ショックを与えました。それが済んでも、電流は切られず、そのまま流しっぱなしだったので」王宮を警備する兵士たちは、家族とともにこの敷地内で暮らしている。

私たちは、王宮本殿を囲む葦のフェンスの入口に足を止めた。

建物自体は、意外なほど簡素で、柔らかいパステルカラーで塗られていた。

「このフェンスは、決して刈り込まれることはありません。

なぜなら、ここに住んでいる王は、まだ“生きている”からです」

「一方、カスビの王墓では、フェンスはいつもきれいに刈り込まれています。

あそこにいらっしゃるのは、“姿を消した”王たちなのです」



過去の痛ましい出来事について、ここまで率直に語ろうとする姿勢には、本当に心を打たれるものがある。
ヨーロッパの多くの国——そして私の母国も含めて——こうした姿勢から学ぶことが、きっとあるはずだ。

送別会

私たちのツアーの最後の目的地は、ホテルからほど近いレストランだった。そこでは、フィオナや多くの仲間たちと一緒に、伝統的な料理を囲んで食事を楽しんだ。

「うちの料理はあまり味がしないのよ。油も塩も使わないから。若い人たちは、西洋の料理のほうが味がしっかりしていて好きなの」同行していた女性の一人が、そう教えてくれた。

その言葉で思い出したのは、英国とイタリアの血を引く探検家、フォスコ・マラーニの自伝の一節だった。

彼が子どもの頃、イギリス人の家庭教師に料理の味について文句を言ったとき、彼女はこう答えたという。

「坊や、料理というものは、おいしくあってはいけないのよ」

私たちに提供された料理の多くは、バナナの葉を鍋代わりに使って調理されたものだった。とりわけ、滋味あふれるスープがとても印象的だった。

こうした調理法は、ここでは一般的で広く親しまれていると説明された。さらに驚いたのは、エスターの話だった。

彼女の祖父の時代には、「グンネラ」という植物の葉を使ってバターを包んでいたのだという。異なる民族や文化のあいだには、たしかにたくさんの違いがある。

でも、それと同じくらい、「私たちはひとつなのだ」と思わせてくれる共通点も、たくさんあるのだ。



バナナのピューレは、私たちのジャガイモベースのものとは異なる、興味深い代替品だった。

馴染みのない味ではあったが——正直なところ、とても心地よい驚きだった。

アフリカからの歌

ナイロビ、そしてアムステルダムへと向かう飛行機へと歩みを進める。

夜のぬるい空気の中、その足取りは静かだ。

左手には、かろうじて見える地平線のすぐ上に、黄色い弓なりの上弦の月が浮かび、

真っ黒な空に静かに輝いていた。

この瞬間、私はどうしてもカレン・ブリクセンの言葉を思い出さずにはられない。

彼女がその言葉を綴ったときに思い浮かべていたのは、別の国だったことは知っている。けれど私は、ひとつのことに

気づいたのだ。人の感情は、国や文化を超えて通じ合う—私の心には、境界線など存在しないのだ。重い病から回復するため、ケニアを離れて故郷デンマークへと帰る際、カレン・ブリクセンは、自分が置いていこうとしている人生に思いを巡らせた。

私はアフリカの歌を知っている。

キリンのことを、背中を見せて眠るアフリカの新月のことを、畑を耕す鋤のことを、コーヒーを摘む人々の汗に濡れた顔のことを歌う歌を。

けれど、アフリカは私の歌を知っているだろうか？

あの平原の空気は、かつて私がまとっていた色で、震えてくれるだろうか？

子どもたちの遊びの中に、私の名を持つものがあるだろうか？

満月の夜、砂利道に落ちる影のひとつが、私の姿に似ているだろうか？

そして——

ンゴン・ヒルズのワシたちは、いまでも私の姿を探しているだろうか？

私の一部は、きっとこの地に残っていく。きっと、私の同僚たちも同じ気持ちを抱いているに違いない。この土地の美しさ、そしてその人々が見せてくれた静かな優しさ——それらは、私の心の奥深くに語りかけてくるものがあった。

私は、自分が与えたものよりも、はるかに多くを受け取ったように感じている。

ふいに、最後のセッションのあとに、ある先生が私に言ってくれた言葉が思い出された。

「この遊びを教えてくれてありがとう。体育の授業で使わせてもらいます」

まったく異なる文化の、まったく異なる言語を話す、遠い国の子どもたちが、かつて私が子どもだった頃に遊んでいたゲームを、そして今、私が自分の子どもたちにも教えているその同じ遊びを、これから楽しんでくれるだろう。

その遊びに私の名前がつくかどうかは、どうでもいい。

もし、私たちがこの研修を通して、先生たちにほんの少しでも「自分にはできる」という自信を届けられたなら。

もし、子どもたちに、ほんのひとつでも多くの笑いや楽しさ、そして学びの喜びを与えることができたなら――

それこそが、私たちにとって最大の報酬になる。

それこそが、私たちの「歌」となるのだ。



ウェブサイトをご覧ください

<https://parentsinternational.org/>

ニュースレターにご登録ください

<http://eepurl.com/dzvS81here>

お問い合わせはこちら：

info@parentsinternational.org

SNSでもフォローしてください：

